

14 県花・県木オリーブの生産振興

■ (農) たどつオリーブ生産組合 ■

(中讃農業改良普及センター ○森末文徳、高八 弘、奥田靖子)

●対象の概要

香川県農業協同組合多度津オリーブ部会は、平成21年に設立されて以来、ブドウ園の耕作放棄地対策として、ブドウよりも手間がかからず、ブドウと労力競合の少ない品目として着目したオリーブの生産拡大を図ってきた。その結果、平成26年には部会員数50名、栽培面積6.6haにまで面積が拡大してきた。

オリーブは、地区内の農業者にとって馴染みがない新しい品目であったことから、栽培を始めてから結実を開始するまでの期間は、耕作放棄地再生利用交付金により平成23年に整備した43aの実証ほを用いた講習会の開催や園地巡回による個別指導に主眼を置き、栽培技術の定着を図るための技術支援を行ってきた。

●課題を取り上げた理由

技術支援を続けた結果、苗木も順調に生長し、平成25年には部会全体で、約800kgが収穫できるようになってきた。しかし、オリーブの収穫は手摘みで行うため、収穫作業に思ったよりも多くの労力を要することがわかってきた。今後、成園化に伴い、収量の増加が見込まれることから、適期に収穫し、安定的に出荷を行うためには、労働力を融通する体制の整備が新たな課題となってきた。また、オリーブの果実は、塩蔵(漬物)加工や搾油を行った後に出荷されるが、近隣にこれらの業者がないことから、加工設備の導入や販路の開拓についても検討する必要性が生じてきた。さらに、産地化を図るためには、更なる栽培面積の拡大が必要不可欠であるが、栽培希望者のなかで、病虫害防除を始めとする作業委託を希望する生産者が増加してきており、これらの調整も課題となっていた。

そこで、これらの課題を解決するため、生産者組織の法人化と加工・販売支援に取り組み、これらの支援を通じて、オリーブの収益力を高め、栽

培面積の加速度的な拡大とオリーブによる地域振興を図ることとした。

●普及活動の経過

1 生産組織の法人化への取組み

今後の生産面積の拡大には、作業受託や利用権設定による面積拡大が必要であると考え、その受け皿となる法人化に向けての誘導を図った。法人化に当たっては、まず、役員の共通認識と理解が不可欠であると考え、法人化のメリットやデメリット、法人化した場合の今後の収益見込み等の資料を作成し、月2回の割合で役員会を開催し、法人化への理解を深めることとした。また、役員会には栽培技術を担当する果樹部門だけでなく、集落営農部門の担当者も参画し、役員の理解を促すための工夫も行った。

平成26年5月から法人化に向けての役員会を開催し、法人設立の必要性が理解された結果、9月にはオリーブ部会員の約9割を占める43名が出資し、「農事組合法人たどつオリーブ生産組合」を設立することができた。



(農)たどつオリーブ生産組合の設立総会

2 加工施設の導入と販路拡大に向けた支援

生産量の増加に伴う販路の拡大と強化が急がれていたため、農業参入を希望していた町内

の企業とのマッチングを行った。その結果、両社で「多度津オリーブプロジェクト」を立ち上げ、共同でオリーブの加工から販売までを行うこと、知名度の向上を図るために「蒼（あお）のダイヤ」という統一したブランドとパッケージで販売を行うこと、県内のイベントでの試食・販売に共同で取り組むことなどを合意することができた。平成27年度には、これらの取り組みを一層強化した結果、12月には、両社が出資し、農林漁業成長産業化ファンドを活用した加工と販売を行うための新法人「株式会社蒼のダイヤ」が設立された。

●普及活動の成果

1 生産組織の法人化への取り組み

平成26年9月に設立された「農事組合法人たどつオリーブ生産組合」は、町から認定農業者として認定を受け、管理作業の受託だけでなく、平成26年には約40aの農地について利用権設定を行ったほか、最終的には約1.4haまで農地を集積する予定としている。また、収穫作業についても組合員間で労働力を融通しあい、課題となっていた果実の適期収穫を可能とすることができた。今後は、収穫期の雇用の確保が課題となると考え、11月にはグリーンツーリズム推進事業を活用した近隣の小学生親子を対象とした収穫作業体験を実施した結果、オリーブ収穫作業の魅力をアピールするなかで今後の雇用確保への足掛かりをつかむことができた。

これらの活動により、前年度末には約0.6haにまで減少していた新規栽培面積も平成27年度末には約1.0haまで増加させることができた。

2 加工施設の導入と販路拡大に向けた支援

プロジェクトをもとに、平成26年産オリーブから両社が協調して県内や首都圏のスーパーなどで本格的に製品の販売を開始した。その結果、塩蔵品、オイルとも短期間で完売することができ、生産者の収益も当初の見込み以上を確保することができた。また、適期に収穫ができたことから、OLIVE JAPAN 2015において開催された国際オリーブオイルコンテストにおいて金賞を受賞することもできた。

なお、新たに設立した「株式会社蒼のダイヤ」では、搾油機やオイルのろ過装置、作業場などの整備を進め、平成28年秋から本格的な稼働を行う見込みとなっている。

3 オリーブの生産拡大と地域の活性化

集荷と加工体制の整備に目途がついたこと、販路が拡大し、販売量も順調に増加していること、オリーブの収益力について再認識されてきたことから、組合員のなかで栽培規模の拡大についての意欲が高まり、周辺地域での新規栽培希望者も次第に増加しつつある。

さらに、消費者との交流や飲食店や企業などの異業種とのつながりのなかで、オリーブを核とした地域活性化にもつなげることができた。



統一ブランド「蒼のダイヤ」

●今後の普及活動の課題

1 栽培面積の計画的な拡大と条件整備

これまで、中生のミッション種を主力に植栽を進めてきたが、生産規模の拡大に対応して早生種やオイル専用種であるルッカ種の導入による労力分散を図る必要がある。また、今後も生産量の増加が見込まれるなかで、新品種の導入による新たな個性化商品の開発についても検討する必要がある。また、オリーブへの理解を深める取り組みを進め、販路の拡大とともに収穫労力の確保のためのサポーター（収穫支援）組織づくりも急がれる。

2 栽培技術の定着による高品質果実生産

平成27年産果実については、多雨の影響を受け、オイル品質の低下につながる炭そ病が多発した。そのため、新規栽培者へ栽培技術を早期に定着することができる教材や防除適期等の情報を迅速に提供できる仕組みづくりが望まれる。